

レファレンス

コーナー

マイクロファイナンスを読む

近藤恭子

近年バングラデシユのグラミン銀行をはじめとする発展途上国の金融が注目されている。その成功を背景に一九九七年にはワシントンで大規模な「マイクロクレジット・サミット」が開催され、世界銀行・国際連合等の開発援助機関、商業銀行、NGO等が集つものとなった。本来担保や保証人がなく融資が受けられない貧困層が融資を受けることができ、しかも高い返済率を誇るというマイクロファイナンスは、貧困緩和対策の有効な制度として評価されつつある。

それではマイクロファイナンスとは何か。この問いに答えてくれる格好の図書が岡本真理子・栗野晴子・吉田秀美編著『マイクロファイナンス読本―途上国の貧困緩和と小規模金融―』（明石書店 一九九九年）

である。同書によれば「マイクロファイナンス」は、発展途上国の貧困層や低所得層を対象にした貧困緩和を旨とした小規模金融のことである。

従来無担保の小口信用貸付を強調して「マイクロクレジット」が使われてきたが、無担保融資に限らず貯蓄制度を含めた持続性のある小口金融サービスを「マイクロファイナンス」と位置づけている。主に政府や援助機関の開発プログラムとして既存の金融機関を通じて行われるものと、マイクロファイナンス専門機関によるものとに大別される。融資規模は一般銀行の事業融資に比べるとかなり少額で、これがマイクロファイナンスの特徴となっている。例えばグラミン銀行の平均初回融資額は七五ドルで日本の購買力に換算すると二五万円程度である。本書は二部構成となっている。第一部は「開発援助とマイクロファイナンス」と題し、開発の脈絡の中でマイクロファイナンスを検討している。第二部は事例研究で、グラミン銀行、同じくバングラデシユのシャプラーニール、ボリビアのソリタリオ銀行、マラウイ農村基金、インドSEWA協同組合銀行、ネパールの農村女性向け生産融資プログラム（PCRW）とバーディア女性綿花生産者組合、米州開発銀行の金融制度を論じている。吉田秀美編『マイクロファイナンスと地域の特性』（国際開発高等教育機構 第二版 二〇〇二年）は前出書の編著者により、ネパール、ジ

ンバブエ、ベトナムの事例を取り上げ分析している。

社会関係資本と援助プログラムとの関係でしばしば事例としてとりあげられるマイクロファイナンスについてベトナムを事例に論じたのが、佐藤寛編『援助と社会関係資本―ソーシャルキャピタル論の可能性―』（アジア経済研究所 二〇〇一年）に収録の吉田秀美著「第7章 社会関係資本とマイクロファイナンス―ベトナムを事例に―」である。ここではベトナム中部ゲアン省の農村を対象に人民信用基金の成功例をあげている。既存の行政区最小単位（コミューン）における金融制度運営に伴いコスト削減、期限内返済の金融規範の浸透でうまく機能している制度である。

注目のグラミン銀行についても雑誌論文三点を紹介したい。

中村まり著「バングラデシユにおけるマイクロクレジット政策の理念と現実」（『アジア経済』第四〇巻九・十号 一九九九年）は、マイクロクレジットのアプローチとして、グラミン銀行に代表されるものとBRAC (Bangladesh Rural Advancement Committee) に代表されるものに分けて検討している。前者は金融サービスのみに特化し営業コストを抑え、より多くの借り手にサービスを提供しようとするもので、担保・保証人を見つけれない貧困層に対応してグループ貸付と連帯責任の方法を取っている。後者は零細企業の資本不

足には貸付で対応し、技能不足、技術情報や管理能力の欠如をトレーニングや技術援助といった非金融サービスで補うというものである。いずれのアプローチも長短あり貧困削減の万能薬ではないが、持続的に融資を利用できることが貧困削減・生活上につながることを分析している。

グラミン銀行の利用者（加入者）の構造を制度上から知るフォーマル構造と現地調査に基づくインフォーマル構造の両面から検討することを試みたのが、坪井ひろみ著「グラミン銀行における借り手集団の相互信頼関係―ネットワーク分析―」（『アジア経済』第四三巻九号 二〇〇二年）である。グラミン銀行の規則によると同性五人から成るグループの結成が加入条件となっており、このグループを最大八つまで統合した単位がセンターとなる。集団におけるネットワークの良否は借り手の活動能率、モラル等に影響を及ぼす。開発政策における集団機能の効果を左右する人間関係は重要であると示唆している。

また、水口美佳子著「小さな信用と貧困問題の解決―グラミン銀行のマイクロクレジットと女性たち―」（『北大法字研究科ジュニア・リサーチ・ジャーナル』九号 二〇〇二年）もグラミン銀行の設立、組織・戦略、女性に焦点をあてており、その概観を把握するには好適である。

（こんどう きょうこ／アジア経済研究所図書館）